

# 後期東ドイツの文学作品におけるメッセージ性の不在

## —消費社会における検閲を通じた文学・芸術の自律化—

専修大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程 矢崎慶太郎

### 1 目的

1970年代後半以降、東ドイツでは、若手アマチュア作家たちが当局の許可を受けない自費出版 (Samisdat) のかたちで文学活動を始めるようになった。それゆえ比較的自由的な言論が可能だったが、しかし現実描写や社会批判は全く行なわれず、もっぱら美的・芸術的なテクニックや言葉遊びに終始した。彼らは自分たちの置かれている状況を「沈黙の増大 (die Vermehrung des Schweigens)」、「失語状態 (Sprachlosigkeit)」、「不在 (Abwesend)」として表現している。健全に何かを言うことができないという状況が、社会とは関わりを持たない内向的な美的・芸術的世界への高い関心へと結びついている。本報告では、なぜ当時の東ドイツの若者たちが、「メッセージ性」のない文学表現へと向かっていったかを考察する。

### 2 方法

芸術・文学において現実描写や社会批判がなくなる傾向、すなわち芸術・文学の自律化が起こる社会的条件として、社会システム理論の文学研究から2つの仮説を挙げ、それを実際の東ドイツ社会で検証していく。1つ目の仮説は芸術の市場化とそれを可能にする消費者社会化が芸術・文学の自律化を可能にする[Luhmann 1996:392]というものであり、2つ目の仮説は、若者たちの社会的疎外が芸術への参与を動機づける[Reinfandt 1997:27]というものである。本報告では、若手作家たちの回想録を中心に、彼らの芸術に対する主観的な意味を探りつつ、東ドイツ研究 (DDR-Forschung) を中心にした文献調査から仮説を検証する。

### 3 結果

社会主義体制であった東ドイツでは、著しく西側諸国との経済格差があったにもかかわらず、価格抑制政策をとるというかたちで1970年代以降、消費社会化は生じていた。それに応じて、芸術・娯楽雑誌などへの需要も高まっていた。しかし他方で政府は極めて不明確・不透明な基準のなかで秘密裏に言論活動への介入を続けており、政府の態度に合致するかどうかの自己省察を強要した。当時の若者たちは、社会全体を見渡せないまま疎外されており、絶えず不鮮明で不可解な周囲の状況を伺いながら、何度も思い悩まなければならない状況に置かれていた。

### 4 結論

以上の結果から、消費社会と社会的疎外とが同時に発生する状況が東ドイツに存在していたと言える。消費社会の影響で娯楽としての芸術や文学の需要が高まる一方、自由的な発言が許可されない環境は、誰もが自由に積極的に参与可能な場所を、メッセージ性のない美的なコミュニケーションの世界だけに限定することになる。一見すると社会から孤立し無意味でしかないコミュニケーションが、どのように社会状況と対応しているのかが、東ドイツの事例から見えてくる。

### 参考文献

- Luhmann, Niklas 1986 "Das Kunstwerk und die Selbstreproduktion der Kunst" Niels Werber ed., 2008 *Schriften zu Kunst und Literatur*, Suhrkamp Verlag, 139-188.
- Reinfandt, Christoph 1997, *Der Sinn der fiktionalen Wirklichkeiten*, Universitätsverlag C. Winter Heidelberg.